
東方幻想夢～2011・襲撃【完全版】

犬兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想夢〜2011・襲撃【完全版】

【Nコード】

N2959Q

【作者名】

犬兎

【あらすじ】

それは、物語の真実に迫る物語。

突如として起こった、人間の里と妖怪の山の全面戦争。

その裏で動き出す、もう一つの物語。

そして、歴史の闇に葬られた真実の物語が幕を開ける。

本編でカットしてしまったエピソードを追加し、全体の話の流れや

登場人物を再構成した本当の2011・襲撃です。
本編とは一部違う箇所がありますので、新規投稿しました。
本編とは違う、もう一つの物語をお楽しみください。

襲撃・序章

水鬼「うん。今日もいい天気だな」

窓を開けて、大きく深呼吸する。今日はいいい日になりそうだ。そんな期待を胸に一階へ降りると、慧音がおはよう、とご機嫌な笑顔で挨拶してきた。

水鬼「ああ、おはよう。——今日は授業、休みだったっけ？」

慧音「ああ。メグが出かけているからな。——だから今日はゆっくり出来るぞ」

今日は珍しく寺子屋もいつもの仕事もない、慧音の休日。どこかに遊びに行こうか、と楽しみに言うが、こちらはそうも言ってもらえない。

水鬼「ま、俺は診療所があるから」

けいね「そんなもの休めばいいじゃないか。——たまの休日なんだ。私に付き合ってくれてもいいんじゃないか？」

水鬼「……あのなあ……」

慧音「たまにはミズキも休むべきだと思うぞ？ 医者の不養生って言うじゃないか。それで医者が倒れたら誰が看るんだ？」

水鬼「・・・分かった。分かったよ」

慧音「よし、決まりだ。――じゃあ、今日は何処へ・・・」

そこまで言ったその時。どん、と強烈な爆音と振動が響く。慧音は驚いて水鬼に抱きついた。

慧音「な、なんだ・・・？ 地震、か？」

水鬼「・・・いや、そうじゃない。――今は、何かが、落下した？」

外が騒がしい。いったい何があったのだろうか。水鬼は逃げ惑う人の中に知っている顔を見かけ、声をかける。

水鬼「おい！ 何があった!？」

商人「先生！ 大変だ！ 商店広場の屋敷に何かが落ちてきて、突然、攻撃してきやがったんだ!!」

水鬼「・・・なんだって・・・？」

これは休日どころじゃなくなったようだな。水鬼は大きくため息をつき、外に出る。

慧音「ミズキ、何処に行くんだ!？」

水鬼「決まってるだろ? 人を寺子屋に避難させるぞ!」

襲撃・第一話

町が混乱に包まれる中、水鬼はその者の姿を見た。炎に包まれ、黒い煙が上がる空を飛ぶ、鋼鉄の物体だ。その全身には巨大な箱。そこから発射されるミサイルの雨。全てを撃ち終えたのか、その箱を外し里の中央に位置する商店広場に投げ込んだ。その箱は明らかにその物体の本来の装備でないことはよく分かる。その証拠に、それが外れたときに現れた姿は、外の世界のニュースで見たことがある、あの兵器であったのだから。

水鬼「あれは・・・」

寺子屋に里の人間を避難させている途中。不意に空を見上げて呟く水鬼に慧音がどうした、と声をかける。

水鬼「慧音、あれを」

慧音「あれは・・・妖怪・・・なのか？」

水鬼「外の世界のロボットだ。――しかも、軍が所有するような戦闘兵器だ」

慧音「そんなものがどうして里に!？」

水鬼「さあね。知らないけど、ひとまず言えることは」

慧音「あいつを倒さなければならぬということ、だな」

水鬼「妹紅がいてくれれば、もう少し楽に戦えるんだが・・・」

慧音「あいつのことは言うな。——まったく、突然行方をくらましたかと思えば、地霊温泉郷にいるなんて手紙をよこしてきて・・・あのバカは」

水鬼「だからこそ、このタイミングなんじゃないのか？」

そうだな、と慧音は呟く。妹紅がいれば、あんな鋼鉄の鎧などいとも容易く溶かして終わりだ。彼女のいないこのタイミングを狙ったの襲撃なのだろう。あれが何処からやってきて、何の目的で里を襲撃しているのかはまだ分からないが、このまま黙って見ていられるほど、慧音も水鬼も甘くはなかった。

慧音「ミズキ、は・・・相変わらず飛べないのか」

水鬼「悪いが、俺の能力は癒しでね。————戦闘向きじゃないし、空も飛べないよ」

慧音「ミズキ・・・得意げに言わないでくれ。ホラ、これを預けておくから」

慧音が渡したのは三枚のスペルカードと剣。日本刀ではなく、どうやら古い時代の両刃剣らしい。鞘に収めたまま使え、と慧音は言

う。

水鬼「鞘に収めたままって・・・それじゃ斬れないじゃないか」

慧音「その刃は斬るための剣ではない。――まあ、今はそんなことを説明する時間はないか。とにかく、鞘に収めたまま使った。それと、スペルカードは私がお前のために考えた新作だ。弾幕戦初心者でも十分使用できるはずだ」

慧音はそう言って、赤色のスペルカードを使うように言う。縁取りされたカードを手に持ち、使用宣言をすると、カードに火がつき、一瞬で燃えて無くなる。これでスペルカードの恩恵を受けることが出来るぞ、と慧音は言うが、特に変わった様子は無い。

慧音「どうだ？」

水鬼「弾幕が出るんじゃないのか？」

慧音「違う。――そのスペルカードはただの身体強化だ。翔符『ジ・イカロス』と名づけた。――お前に渡したスペルカードは、いずれも使うと私の霊力を持つていくことが出来る。要するに、私の力が使えるようになるということだ。今のカードの効果は、私の霊力を使い、空を飛べるようにするというものだ」

水鬼「・・・お、ホントだ」

慧音「ミズキなら、すぐに感覚をつかめるはずだ。——さ、さつさとあいつを止めにいくぞ！」

ふたり、空を飛び、セラフの待つ場所を目指す。しかし、その途中でセラフに気づかれたのか、ミサイルが飛んできた。

水鬼「お、おいおい！ シャレにならんっての！」

慧音「打ち落とすぞ！ 爆風で吹き飛ばされるなよ！」

慧音は的確にミサイルの中心を射抜き、爆発させる。案の定、強烈な爆風に吹き飛ばされるが、慧音がとっさに手を引っ張り、水鬼を抱き寄せて一緒に煙の中を突っ切る。そして、一直線にセラフの前までやってきた。

ふたりは抱き合うような形で宙に浮き、静止してセラフと対峙する。

慧音「これが外の世界のカラクリ人形か・・・興味深い」

セラフ「・・・半妖を確認。——人物特定。上白沢慧音と水鬼」

慧音「私を知っているのか！？」

水鬼「そりゃそうだろ。——人物を特定できなきゃ、同じ場所にいる友軍を巻き添えにしてしまうからな」

セラフ「靈力測定・・・危険値突破——計画の障害と認識します」

慧音「おお、どうやらミズキも靈力が危険値もあるらしいぞ」

水鬼「それは・・・光栄なことだっ!!!」

慧音の肩を押し、二人は散開する。放たれたレーザーを回避し、大回りで再びセラフに向かう。慧音の動きには一切の無駄がなく、さらにはセラフの追撃の機銃を自分の方向に向けさせて、こちらの動きを支援してくれている。幾度と無く戦い抜いてきた慧音の慣れた動きに対し、水鬼はようやく空を飛ぶコツがつかめてきたという感じだ。それでも慧音が作ってくれた隙を使わないわけにはいかないと、貰った剣を構え、セラフに再び接近した。

慧音「今だ！ ミズキ!!!」

水鬼「どこまでやれるか分からんが・・・くらいな！」

剣はセラフの肩に命中する。ゴン、と鈍い音がして、その衝撃が水鬼の体に伝わってくる。手が痺れた。案の定、打ち負けているし、傷一つつけることが出来なかった。

慧音「あちゃあ・・・やっぱり無理があったか・・・」

水鬼「鞘に収めただからだろ！ これ、抜くぞ！」

慧音「抜いてもいいが、さび付いているから斬れんぞ」

水鬼「はあ？」

慧音「とにかく、その剣はそのまま使え。――それと、どうやら、敵も動きを見せてきたようだ」

里の周囲を取り囲む妖怪の影が遠く見える。だんだんと接近してきているようだ。攻撃が本格化するってワケか。水鬼が呟くと、慧音は水鬼に一気に接近し、彼を地面に叩き落した。

慧音「このままでは寺子屋に避難している者たちも危ない！ 私がここを抑えておく間に、里の外に逃がすんだ！」

水鬼「逃げるったってどこに逃げるんだよ！」

慧音「迷いの竹林だ！ そこならば天狗も追ってはこない！」

水鬼「・・・迷って死ぬかもしれないぞ」

慧音「ここで殺されるよりはましだろう？」

そりゃそうだ。水鬼は頷き寺子屋に向かう。そして、残った慧音はセラフと、周囲を取り囲む妖怪の群れを見つめ、ため息をつく。

慧音「退治屋が妖怪たちを抑えているはずだ・・・妖怪といえど、さすがに罪もない住人を殺すつもりもないだろう。・・・だが」

慧音「どうしてだ・・・どうしてこうなった・・・」

セラフ「・・・上白沢慧音の排除を開始する」

慧音「これがあなたの目指した世界の結末かっ！！！」

水鬼は寺子屋に避難している人々を誘導し、迷いの竹林へと連れて行く。だが、その途中で水鬼の行く手を阻むのは、里を包囲していた天狗たちであった。

天狗「ここは通さん！！」

水鬼「妖怪・・・？　これは、お前たちが仕掛けたことなのかっ！？」

天狗「答える義理はないっ！！」

水鬼「————なら、押し通る！！」

槍を持った天狗たちが水鬼に向かってきた。水鬼は例の剣で攻撃を凌ぎ、妖怪たちを吹き飛ばす。

天狗「な、なんて力だっ!？」

水鬼「だが、困ったな・・・これだけの数。安全に通すのは難しいぞ」

避難民は百人ほどこいた。弾幕を得意とする妖怪相手に、それだけの数がここを通過するのは至難の業である。どうしたものか、と悩む水鬼に迫る妖怪の群れ。勢いで避難民を連れてきたのは間違いだったかと後悔するが、こうなった以上、仕方がない。

水鬼「こうなりや、本気で行くしかないか・・・っ!　って、あれ?」

一斉に飛んできた天狗が一気になぎ払われる。まわし蹴りで妖怪を吹き飛ばしたその女性は、水鬼を見て、こんにちは、と挨拶する。

水鬼「あ、あんた・・・図書館の・・・?」

こあ「ああ、その人とは別の人ですよ。ここは私に任せてくださいね」

水鬼「・・・出来るのか?」

こあ「それが、出来ちゃうんです」

こあは一枚のスペルカードを取り出し、怪しく微笑む。

こあ「停符『小悪魔ウイंक』!!」

こあがかわいらしくウイंकすると、天狗たちは一斉にその動きを止めたではないか。驚く水鬼に、今のうちに逃げてください、とこあは言う。

水鬼「・・・気にしたら負けか」

こあ「そういうことです」

水鬼は皆を連れて里を離れる。おのれ、と叫ぶ天狗たちを見上げて、彼女は笑っている。

こあ「さて、と。――これでいいでしょう。後は、どうにでもなりますよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2959q/>

東方幻想夢～2011・襲撃【完全版】

2011年1月26日13時25分発行